

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー【2015No.35】(HP 掲載)

分類：CD

作曲家：ヨハン・セバスチャン・バッハ

曲名：ヴァイオリン協奏曲1番他

演奏：ジュリアーノ・カルミニョーラ (ヴァイオリン) コンチェルト・ケルン

発売：ARCHIEV

No. : UCCA-1100

概要：



カルミニョーラとヴェニスバロックオーケストラの演奏会に行き買い求めてきたものですが、本CDのネット上の紹介記事では次のような記載があります。

「バロック・ヴァイオリンの帝王カルミニョーラによるバッハの協奏曲集！

2つのヴァイオリンのための協奏曲では、コンチェルト・ケルンのコンサート・ミストレス平崎真弓が第1ヴァイオリンを担当（カルミニョーラは第2ヴァイオリン）。ヴァイオリン協奏曲の編曲と考えられている2曲のチェンバロ協奏曲も収録！モダン演奏とは一味違う艶やかな時間が流れ、聴き手を瞬時にバッハが暮らした時代へタイム・トリップさせてくれる極上の一枚。」

収録されているのは次の曲です。

J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041

J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲 第2番 ホ長調 BWV1042

J.S.バッハ：二つのヴァイオリンのための協奏曲ニ短調 BWV1043

J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲ト短調 BWV1056R

J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲ニ短調 BWV1052R

例えば、ヴィヴァルディの四季などイタリアバロックをドイツとイタリアの古楽グループが演奏すると、まったく違ったスタイルで演奏されるので、コンチェルト・ケルンという正統派ドイツ古楽アンサンブルとカルミニョーラの組み合わせで水と油になるのではないかと危惧して聴き始めましたが、どうやらコンチェルト・ケルンがカルミニョーラに歩み寄ったような印象で、イタリアンスタイルのバッハになっています。カルミニョーラのヴァイオリンはバッハの演奏ということから奔放なテクニックは少し控えめですが、バッハを演奏してもあくまで流麗な美音を聴かせてくれます。

いくつかの同じ曲が収録されている、諏訪内晶子とシュトイデがヨーロッパ室内管弦楽団と演奏したCDとも聴き比べてみましたが、こちらの方が常識的なバッハと言う印象です。

